

安全衛生活動の推進役として

石山 孝

先端基礎研究センター（部安全衛生管理者）

先端基礎研究センターの安全衛生管理を担当して、早、2年2ヶ月を過ぎようとしています。就任当初は、グループ員の顔と名前が一致せず、「この人に連絡をしなければ」と思っても、なかなか思い通りに連絡ができなかったことや、当センターで使用している毒物、劇物、化学薬品、放射性物質及び核燃料物質等の所在・管理状況及び各管理区域の使用状況を完全に把握するのに四苦八苦していました。しかし、今では他部門、研究利用施設等への苦情、陳情、その他もろもろの処理をこなせるまでに成長し、あたかも当研究センターに長年勤務しているかのような錯覚を覚えながら、日常の安全衛生管理活動を行っている今日この頃です。

原子力分野における「安全の確保」は、原子力施設に勤務している従業員は基より、隣接住民、更には、国民全体の健康と生命を守る上で重要です。また、「安全の確保に対する責任と役割」も他の分野に比べてかなり重く、周囲に与える影響力も絶大なものがあります。このような状況を踏まえ、先端基礎研究センター 部安全衛生管理者としては、当センターにおける自主的な安全衛生管理の活動を促進し、職場に密着した適切な安全管理を行い、安心して研究活動が行える職場作りを促進していく責任をひしひしと感じています。

そこで、平成19年度 先端基礎研究センター独自の安全対策目標として次のようなことを重点項目に設定し、潜在的危険性の低減に努めています。

- ① 不必要な薬品を出しっぱなしにしない。
- ② 毒物劇物の保管管理を徹底する。
- ③ 薬品廃液の適切な処理・管理に努める。
- ④ 核燃料物質、放射性物質、放射線発生装置の使用並びにこれらにより汚染されたものを取り扱う場合は、法令順守と災害防止に努める。
- ⑤ サーベイメータによる汚染検査を徹底する。

これらは、「研究推進」と「安全の確保」は一体であると自覚し、遵守すべきもので、事故・災害発生を未然に防止するための基本でもあります。

事故・トラブル発生事例で、「実験工程上の慣れ」とか「めんどくさい」等の理由で「安全の確保」を後回しにしたとか、安全の確保を充分に行わなかつ

た為に予期せぬ事故に発展したという事があります。また、危険要因が二つ、三つと重なった事で大事故を誘引したという事例も耳にします。しかし、日常の作業、実験等において、注意力をもう少し高め、社会に及ぼす影響を常に念頭におき、安全確保重視の基本を再確認し、安全を土台とした研究・実験を遂行していれば、かなり高い確率で事故・トラブルの発生を未然に防止できるのではないのでしょうか。最近になって、事故、災害の発生を未然に防止するために労働安全衛生法によるリスクアセスメントの位置づけがなされています。これは、危険性有害性等の調査を事業者の職場ごとに実施し、①リスクの見積もり、②リスク低減のための措置内容の検討、③リスク低減措置の実施をするというものです。研究を主体とする職場においても、例外なく職場の実態に合わせたリスク管理を行うことが要求されているのです。このような状況において、当センターではそれぞれの作業、実験上でのリスクをできるだけ低減できるように、各々の実体に合わせながら安全確保の為の指導を心がけています。

二年間を振り返ってみると、先端基礎研究センターにおける安全意識はトップダウン的にかかなり浸透してきているし、向上していると思います。センター会議等においても、「安全確保は研究を行っていく上での基本であり、重要なことです」と、センター長自らその必要性を力説して頂いています。先端基礎研究センター全体の安全管理体制においても、部門のトップ、研究者、そして安全管理担当者が一体となり「安全の確保」に万全を期しており、安全衛生水準の向上に努めています。その甲斐あって、研究者一人ひとりの危険に対する感受性及び安全意識は益々高まっており、事故、災害などは発生していません。

今後とも、「原子力の躍進は、安全なくしてはありえない」ということを肝に銘じ、先端基礎研究センター 部安全衛生管理担当者としての責任を痛感しつつ、安全衛生管理業務の遂行に尽力していきたいと思っています。